

クロスロード

CROSSROADS

6

2026
JUNE



特集

日本人だからこそできることは？ “ニッポン”を伝える意義とコツ

派遣国の横顔 [ナミビア]

独立から36年、これからの発展が期待される若い国
厳しい社会環境下の若者への支援が求められる



配属先のスポーツ専門校で試合形式の野球練習を実施。
皆とても盛り上がり、スマホの前で思い思いのポーズを
取ってくれました(タイ)



途上国でのスポーツを通じた支援活動に対して、 スポーツ庁長官の感謝状を頂きました

岸 卓巨^{きし たくみ}さん (ケニア/青少年活動/2011年度2次隊・東京都出身)

今年2月24日、都内で開催された「スポーツ・フォー・トゥモロー カンファレンス 2026」の場で、私が代表理事を務める一般社団法人A-GOALの活動に対してスポーツ庁長官感謝状を頂きました。このカンファレンスはスポーツ・フォー・トゥモロー(※)の一環で、スポーツを通じた国際交流・協力に関わる各界の人々が集う年に1回の会合です。その中で、「国内外におけるスポーツ国際交流・協力事業や東京2020大会のレガシーを継承・活用した国際的な取り組みを実施し、他団体に参考となる事業を行った正会員」を対象に感謝状が授与されていて、今年の授与団体の一つとしてA-GOALが選ばれたのです。

私がA-GOALの活動を始めたのはコロナ禍が始まった2020年のことでした。私の知人で、隊員時代にお世話になったケニアのサッカークラブ指導者から「ロックダウンで失業者が増え、食べる物にも困る状況が広がっている」との声が届きました。そこで、アフリカ各地の地域に根差したスポーツクラブへ日本から資金を送り、クラブをハブとして地域住民に食料・生理用品などを届ける緊急支援活動を行ってきました。

また、22年にはケニアの首都ナイロビにあるアフリカ最大級のスラム、キベラスラムでサッカーリーグ「キベラA-GOALリーグ」を創設。今や男女2,000人以上の子どもたちが参加していて、私たちはサッカーを通じた青少年育成や食料提供などを組み合わせて広く社会課題に取り組んでいます。今回の感謝状では主にこの活動を評価していただきました。

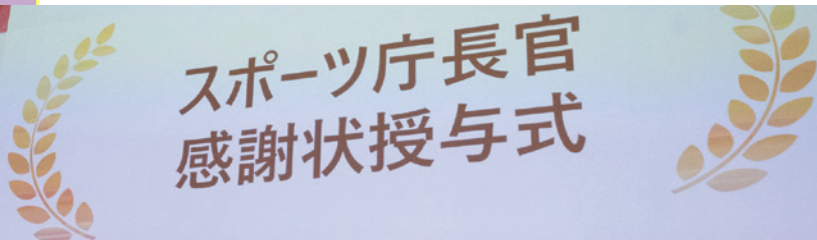
そして、この機に初めて実現したのが、このリーグの発起人でチェアマン・副チェアマンを務めているラシッド・

ケネスさんとコリンズ・ワソングさんの来日です。以前から彼らには日本を知ってもらいたいと思っていて、今回の授与式は良い機会だと考えました。2人の到着日は余裕を持ってカンファレンス前日を予定していたのですが、ケネスさんの急な仕事による出発の遅れもあって、結果的にはギリギリのスケジュールになりました。ただ、日本からの招致状などのおかげで途中手続きがスムーズに進んだことも幸いし、当日の開会直前、成田空港から無事に会場へとたどり着いてくれました。

授与式ではケネスさんとワソングさんが壇に上がり、協力隊OVでもあるスポーツ庁の河合純一長官から感謝状を受け取りました。その後の数日間の日本滞在中には、日本の支援者・関係者と交流してもらい、日本の小学校やスポーツの現場を視察する機会も設けました。日本から大勢の人が活動に目を向けていることを改めて意識して、両人ともリーグの取り組みに対する意気込みを新たにしてくれたようです。

22年から続けてきたリーグの活動が公的機関から認められたことは、A-GOALの一つの節目だと感じています。現在、リーグは9~15歳を対象としていますが、失業率の高いケニアにおいて、その後の進路に対する支援も重要です。そこで今後に向けた展望としては、16歳を超える世代のチームづくりと、日本企業とも連携した雇用支援にも挑戦したいです。アフリカの青少年の未来の選択肢を増やす取り組みに、引き続き努めていきたいと思えます。

※スポーツ・フォー・トゥモロー…スポーツを通じた国際交流や国際協力を通じ、世界の人々にスポーツの価値やオリンピック・パラリンピックに係る活動を広げることを目指す、官民連携による取り組み。東京2020オリンピック・パラリンピックを契機に始まった。



上：A-GOALリーグの目的は、練習や試合に熱中させることを通じて子どもたちを犯罪やドラッグなどから遠ざけるということにある。リーグ参加を通して奨学金を獲得したり、選抜チームによる海外遠征も実施。毎週末の試合日には食事を提供している
左：授与式当日の様子。今年は4つの団体に感謝状が贈られた



COLUMN — 表紙によせて

タイ国内に20校ある公立の中高一貫のスポーツ専門校の1校で、野球を指導しています。写真は、男女混合で試合形式の練習をした後の一枚。基礎練習とは違ってチーム同士の競争心もかき立てるため、生徒たちは大盛り上がり。興奮冷めやらぬまま、練習の撮影用のスマホの前で思い思いのポーズを取りました。野球の楽しさが彼らの記憶に残ってくれればと思っています。

中山 慎さん(タイ/野球/2023年度4次隊・沖縄県出身)

CONTENTS

- 2 JICA Volunteers' Reports
- 3 CONTENTS／索引
- 4 JICA海外協力隊派遣現況
- 5 [特集]
日本人だからこそできることは？
“ニッポン”を伝える
意義とコツ

- 12 知っていますか？ 派遣地域の歴史とこれから
派遣国の横顔 [ナミビア]

- 17 お悩み相談
アドバイスを聞きました！

- 18 派遣から始まる未来
先輩隊員たちの社会還元

- 20 INFORMATION
— JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ

- 21 あの日、地球の、あの場所で。

- 22 OB・OGシヨップファイル

- 23 隊員めし — 任地の食生活に彩りを！

- 24 公開！私の派遣国生活 [チュニジア]

国別索引	掲載ページ
ウズベキスタン	6
グアテマラ	17
ケニア	2
ザンビア	12
タイ	1
チュニジア	24
ドミニカ共和国	8
ナミビア	13、14、15
ニジェール	18
バブアニューギニア	23
ブラジル	21
ペルー	21
モロッコ	9
モンゴル	22
リベリア	12

職種別索引	掲載ページ
コミュニティ開発	6、23
村落開発普及員	12、13、17
土木	14
青少年活動	2
野球	1、21
音楽	24
日本語教育	8、9
数学教育	15
小学校教育	22
感染症対策	18

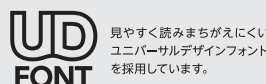
出身都道府県別索引	掲載ページ
宮城県	13
東京都	2、17、24
神奈川県	6
京都府	8
長野県	15
愛知県	22
大阪府	12、18、21
兵庫県	23
岡山県	9
広島県	14
沖縄県	1

『クロスロード』(通常号)は、JICA海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元をする際の情報を提供する雑誌で、年に9回発行しています。

【凡例】JICA海外協力隊の隊員(経験者を含む)については、次のように表記しています。

国際協力子さん(ケニア/環境教育/2026年度1次隊)
氏名 派遣国 職種 隊次

JICA海外協力隊には、「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。



JICA 海外協力隊派遣現況

2026年4月末現在

現在の
派遣国数

74カ国



アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	35	1
エチオピア	15	
ガーナ	30	
ガボン	12	1
カメルーン	19	
ケニア	35	
ザンビア	34	
ジブチ	8	
ジンバブエ	17	
セネガル	27	3
タンザニア	28	
ナミビア	11	
ベナン	12	
ボツワナ	17	1
マダガスカル	35	
マラウイ	27	
南アフリカ共和国	4	
モザンビーク	5	1
ルワンダ	28	1

アジア地域

国名	一般	シニア
インド	8	
インドネシア	23	
ウズベキスタン	17	
カンボジア	30	
キルギス	27	1
ジョージア	15	
スリランカ	14	
タイ	37	1
タジキスタン	6	4
ネパール	24	2
バングラデシュ	1	
東ティモール	32	
フィリピン	21	
ブータン	21	1
ベトナム	40	
マレーシア	18	2
モルディブ	6	
モンゴル	28	1
ラオス	44	2

大洋州地域

国名	一般	シニア
キリバス	5	
サモア	11	
ソロモン	27	1
トンガ	16	1
バヌアツ	22	
パプアニューギニア	13	
パラオ	19	2
フィジー	10	1
マーシャル	11	2
ミクロネシア	18	1

欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	8	

中東地域

国名	一般	シニア
エジプト	16	
チュニジア	10	
モロッコ	23	
ヨルダン	17	

中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
アルゼンチン	6	8	1	
ウルグアイ	2			
エクアドル	24	1		
エルサルバドル	28			
キューバ		2		
グアテマラ	22			
コスタリカ	22			
コロンビア	24	2		
ジャマイカ	8			
セントルシア	9	1		
チリ	6	1		
ドミニカ共和国	20		5	
ニカラグア	19			
パナマ	16	1		
パラグアイ	22	4	6	1
ブラジル			41	
ベリーズ	13			
ペルー	34			
ボリビア	47	1		
ホンジュラス	28			
メキシコ	12	4		

合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 (男性/女性)	1,391 (508/883)	55 (38/17)	60 (20/40)	2 (2/0)	1,508 (568/940)
累計 (男性/女性)	49,437 (25,778/23,659)	6,756 (5,453/1,303)	1,700 (658/1,042)	557 (258/299)	58,450 (32,147/26,303)

一般 = 青年海外協力隊/海外協力隊 シニア = シニア海外協力隊 日系一般 = 日系社会青年海外協力隊/日系社会海外協力隊 日系シニア = 日系社会シニア海外協力隊 (単位: 人)

特集

“ニッポン”
を伝える
意義とコツ

開発途上国へ赴任すると、日本人というだけで嫌でも目立ち、珍しがられることが多いでしょう。本特集では、日本人だからこそできるアプローチで活動を展開した隊員の事例を紹介するほか、日本語教育隊員の方に、日本語・日本文化を伝える過程で感じた活動の意義を伺いました。これをヒントに、自分ならではの存在感の出し方を見いだしていただければと思います。

Text = 秋山真由美 (P6-9)、飯淵一樹 (本誌 p10-11) 写真提供 = ご協力いただいた各位

その1 日本語・日本文化を 活動に生かす

配属先での寿司パーティの様子。寿司を媒体として立場の異なる人々の交流が生まれた



職場も職責も超えて交流を育んだ ニッポンの寿司



こはらるか
小原瑠夏さん
ウズベキスタン/コミュニティ開発/
2023年度2次隊・神奈川県出身

大学在学時に派遣留学にてイギリスのリーズ大学で開発学と博物館学を学ぶ。卒業後、積水化学工業株式会社に入社。車輛やモバイル向け素材の海外営業を経て、新事業開発部イノベーション推進グループに所属して社内ビジコンの制度設計に携わる。社のボランティア休職制度を利用して現職参加でウズベキスタンへ赴任し、隊員時代には現地の大学院で教育学とイノベーションの学位を取得。帰国後の現在は復職して活躍中。

JICA Innovation Quest (※) に参加してタジキスタンとの共創事業発案に取り組み、それを契機として「中央アジアにハマった」という小原瑠夏さん。ウズベキスタンの首都タシケントにあるウズベキスタン・日本青年技術革新センター（以下、UJICY）でのコミュニティ開発の案件を「まさに自分のための要請」と感じ、休職して協力隊に参加した。

UJICYは2016年にウズベキスタンと日本両政府の合意の下で設立された研究機関で、両国の大学や企業、研究機関などの連携を通じたイノベーションの創出を担う。「化学および石油化学ラボ」「鉱業および深層鉱物処理ラボ」「エネルギー、再生可能エネルギーおよび省エネルギーラボ」「機械工学および材料科学ラボ」の4つのラボがあり、計30人の職員・研究者などスタッフが勤務していた。

「スタッフと交流してイノベーションを啓発するような企画や広報活動をしてほしいという要請でしたが、いざ赴任するとカウンターパート（以下、CP）はおらず、ラボ間も縦割りにつながりが乏しく、具体的なニーズを見いだせない状況でした」

研究者たちはそれぞれのラボにこもり、廊下で会っても話したりすることはほとんどない。小原さんは焦りや不安を抱



習字体験では墨汁を使用しつつ、紙は現地で売られているA4サイズのコピー用紙で代用。半紙と比べて紙質が硬く、かえて使いやすいかったという



当初は着付けに自信がなく尻込みしていたという小原さんだが、「日本人が何人か集まって試行錯誤すれば、意外にきちんと着せることができました！」

えていた。

転機が訪れたのは2年目だ。新しいCPが日本語に関心を示し、「日本語を教えてほしい」と人を集めてきたのだ。一瞬ためらいはあったが、小原さんはこれを一つのニーズと捉え、4つのラボをつなぐチームビルディングとしての日本語講座「日本語クラブ」を立ち上げた。

毎週月曜日、研究の合間に研究者や学生たちに日本語の挨拶や自己紹介などを教えたり、茶道や浴衣、習字などの日本文化体験イベントを開催したりする場を設けた。時には、他の隊員や日本から来た友人を招き、日本人と話す機会もつくった。そんな活動を重ねるうちに、ラボのトップを含め、さまざまな立場の人たちが参加するようになっていった。

中でも好評だったのが、巻き寿司イベントだ。小原さんは日程を決めてポスターを作成し、テレグラムで案内を共有。そしてボランティアルームにあった巻き簀や箸、法被などを確保し、当日は、米8合と粉末のすし酢、のりを用意した。「具は、サーモン、クリームチーズ、チキン、キュウリなど、ムスリムの彼らが食べられそうなものを選定。初回は私が準備しましたが、2回目からはみんなすごく協力的になって、

好きな具を持ってきてくれたり、手伝ったりしてくれました」中には、ラボ内の3Dプリンターで寿司型を作成して持ってきた研究者もいた。「ソ連時代の影響か、仕事の仕組みは基本的に上意下達なので、彼らが自発的に何かを考えてする姿を見たのは初めてでした。寿司の魅力の大きさを感じました」。

活動を通じて、ニーズをつかむためには何げないコミュニケーションが大事だと気づいたという小原さん。「ウズベキスタン人にとって日本語学習はさほど必要ないといえますが、『相手が日本人なら日本語で挨拶や自己紹介をするほうが心は近づく。そのために日本語を習いたい』と言ってくれた人もいました。それを聞いて、ニーズは聞いて得るものではなく、一緒に食事や雑談する中で見えてくるものだ」と学びになりました」と振り返る。そして、隊員としての自身の存在意義についても、気づかされたことがあった。

「ラボの人たちが集まってくれたことが嬉しかったです。立場や職責、性別の垣根を越えて交流が生まれ、いい笑顔が見られたことに心が温くなりました。私の役割は、そういう“場”をつくることでもあったのだと思います」

※ JICA Innovation Quest … JICA内の新規事業アイデア公募により、組織の枠にとらわれないオープンイノベーションを掲げて発足した事業。さまざまな業種の人材を交えて新しい国際協力のアイデア創出を目指す主旨で、2018年度から22年度に実施された。

見いだす活動成果

その2

日本語教育隊員が

現地の複数の日本語学校と京都府の学校をつないだ交流授業。「日本や日本の文化の中で生活している子どもたちと話がすることができて、とても面白かった」といった感想の声があったという



ルーツを知り、日系移住者の思いをつなぐ 日本文化を伝え続けた意義



まつのちかこ
松野千夏子さん

日系/ドミニカ共和国/日本語教育/2021年度3次隊、日系短期/ドミニカ共和国/日本語教育/2024年度9次隊・京都府出身

新卒から小学校教員として長年勤務。仕事や家庭の一段落を機に日本語教師の資格を取得し、早期退職して大学時代から興味があった協力隊員としてドミニカ共和国へ。日系人協会が運営する日系日本語学校で、日系の児童・生徒たちに日本語を教えた。任期を終えた現在も役に立ちたいと、短期間ながら再度現地の日本語学校で働いている。

小学校の教員として長年勤めた松野千夏子さんは、2022年に協力隊員としてドミニカ共和国へ赴任。首都サントドミンゴにある首都校と、ダハボン、ピセンテノブレ、ハラバコアにある地方校の計4つの日系日本語学校で、6歳から18歳までの日系の児童・生徒に日本語を教えた。彼らのほとんどは親などに非日系人のルーツも持ち、普段はスペイン語を話す。

授業では、こまやすごろく、けん玉といった昔遊びや、風呂敷の使い方などを取り入れ、日本語と同時に日本文化にも多く触れられるようにした。上級生が下級生に日本語で教えるやり方を取り入れると、得た知識を誰かに伝える経験が理解を深め、日本語を話すことへの自信にもつながったという。

教壇に立って直面したのは、日本の教育現場との「当たり前」の違いだ。皆、時間どおりに行動する習慣がなく、遅れても気にしない。さらに掃除は清掃員の仕事とされ、平気で食べ物のごみや消しゴムのカスを床に落としていた。そこで「消しゴムのカスは集めてゴミ箱に捨てるんだよ」と伝えると、返ってきたのは「どうして?」という素直な疑問。「教室を気持ちよく使うために皆できれいにしよう」と伝える一方で、松野さんの価値観も揺れた。なぜなら、子どもたちも日本語学校の外に出れば、普通のドミニカ共和国人としての生活があるからだ。

「例えば、現地ではバスが時間どおりに来ませんが、それが当たり前の社会では10分や15分遅れても支障などありません。

時間を厳守する日本と、時間を気にしないドミニカ共和国。どちらが正しい、正しくないではなく、それぞれがその国の暮らしてあり、文化なのだと思います」

とはいえ、せめて日本語学校にいる時間内は日本的な礼儀や思いやりを学んでもらおうと、「整理整頓」「時間を守る」などの目標を掲げ、伝え続けた。

「1年半ほど続けると、進んで掃除をしてくれる子がだいぶ増えました。自身の希望というより親や祖父母の勧めで通っている彼らが、自らのアイデンティティに誇りを持ち、価値観や文化をつないでいく上でも重要だと思います」。授業後、迎えに来る親とも言葉を交わし、「こんなことを頑張っていたよ」と子どもの様子を伝えた。

ドミニカ共和国の日系人社会は、かつて移民した人々が土地を開拓し、築いてきた歴史の上に成り立っている。日系1世や2世が大切にしてきた日本人としての良さを次世代に受け継ぐため、子どもたちが日本語や日本文化を学ぶ意義は大きいだろう。そして現地社会への同化が進んだ「ドミニカ共和国人」としての彼らにとっても、日本らしさに触れることは新しい刺激となり、わずかずつでも行動に変化をもたらしてきたようだ。



日本語学校での授業の様子。児童・生徒は基本的に現地の一般校に通っていて、週に1日ほどの頻度で日本語学校へやって来る

“同好の士”の交流拠点としての日本語教室 他者を認める力は国際人の第一歩にも

モロッコの首都ラバトにあるモハメッド5世大学文化人類学部で日本語講座を担当した永田裕貴さん。前任の隊員はコロナ禍で緊急帰国したため、その後は現地の日本語教師5人が土曜日クラスのみを継続していた。「やっとネイティブの先生が来た!」と歓迎された永田さんは、平日の昼・夜2回と土曜日の授業に加え、ピクニックや漫画展の見学などの課外活動も企画して活動に臨んだ。

初級クラスではフランス語やダリジャ（モロッコ方言のアラビア語）を交えることもあったが、モロッコ人は語学習得が早く、動詞の活用もすぐに上達。その一方で、文化や習慣に関わる分野ではイスラム圏ならではの難しさにも直面した。豚肉を食べることやお酒を飲むことについてなぜかと聞かれ、「おいしいから」「楽しいから」といった説明は通用せず、「でもコーランでは違うのに」とため息をつかれることもあった。日本の童謡「お正月」を皆で歌うことを提案した際は、後から「(他の宗教・文化に根差した歌なので)ムスリムとして歌えない」と受講者からのメールが届いたこともある。

「日本も含めて、文化のベースには宗教が介在していると改めて気づかされ、まずは相手の宗教観を理解しなければいけないのだという学びになりました。他方、とても尊敬している同僚に相談したところ、『私はムスリムとしての信念があるからこそ、他の文化を認められる。日本へ旅行に行った時も神社の建物などは美しいと思った』と言われ、はっとしたことを覚えています」

そのような全くの異文化の中で、永田さんが日本語教育の一つの意義として感じたのは“場”としての価値だった。

授業は大学の学生だけでなく一般にも開放されていて、高校生から60代まで幅広い層の人が学びに来ていた。近隣の大学の日本語クラブからも「日本人の先生に習いたい」と学生



ながた ゆき
永田裕貴さん
モロッコ/日本語教育/
2022年度3次隊・岡山県出身

ライブハウス勤務やワーキングホリデーなどを経て、日本語教師の道を志し、ベナンなどで日本語教育に携わる。30代で大学の文学部に入學。卒業後はフィリピンで日本語教師として働くつもりだったがコロナ禍で頓挫。先行きに不安を感じる中で協力隊に応募し、2023年から25年1月までモロッコの首都にある大学で日本語を指導した。帰国後の現在は沖縄で在住外国人に日本語を教えている。

がやって来ていて、受講者の多くは、子どもの頃に日本のアニメを見て日本に興味を持った人だった。同僚からは「コロナ禍でも日本語講座が継続できたのは、皆が集まる場であり、家族のような存在だったから」だとも聞いていて、「共通の趣味や目的を持つ人同士が知り合い、交流できる場があることの大切さを感じました」。

また、受講者の中には、かつて日本語学習を挫折した人や、子育てが一段落してから学び直す人などもおり、その背景はさまざま。授業内の会話で人生の後悔や将来の夢などを語ってくれる人もいて、永田さんも含め、皆にとっても学ぶことが多かったという。

関わる相手への尊敬の念を欠かさないと同時に、精神的に頼り過ぎない距離感で活動したという永田さん。「悩むことも多かったですが、最後に教え子から日本語で手紙をもらった時、2年間でちゃんと種をまけていたのだと感じました。日本語教育は、さまざまな文化や宗教をベースに生きる人々の存在を知ってもらい、他者を受け入れて認めることができる“国際人”を世界で育てる一歩だと思います」。



上：日本語クラスの教え子たちとの一枚。配属先の事情もあって思うような活動ができなかったものの、同僚や教え子との人間関係には非常に恵まれたという
左：おにぎり作りや茶道などを取り入れた体験型の文化イベントを行ったところ、新入生に対して先輩が自ら日本文化を紹介できるようにもなった

日本語・日本文化を生かした隊員に伺いました！

日本について聞かれた時はどうするか？

日本と関わりの深い配属先での活動や、日本語教育隊員としての派遣といったケース以外でも、日本人ボランティアとして赴任するだけで任地では目立ち、日本のことをいろいろ聞かれたりするもの。ここでは、今回の取材に登場した先輩隊員たちに、日本についての質問にどう返事をしていたか伺いました。

日本語に
いくつも文字があるのは
どうして？ …と聞かれた時

平仮名・片仮名・漢字の3つの文字を混ぜて使う日本語。他の国では珍しい仕組みなので、それを知った人からはなぜなのか？どのように機能するのか？と疑問を持たれるだろう。歴史的な背景からじっくり説明するのもいいが、本特集の先輩隊員はどう答えたのか。



松野さん(ドミニカ共和国)

私の場合、ドミニカ共和国人からは「文字が3種類もあるなんて難しいね！」と言われて、疑問というよりは驚きが強い様子でした。そういう時は、それぞれの文字の役割という切り口から使い方を説明し、その組み合わせがあるから理解しやすくなるのだと話しました。

例えば、平仮名は単語と単語を結びつける、片仮名は外来語や強調したい単語に使う、漢字は表意文字なので同音異義語の区別に役立つ…などと具体的な例文も使いながら伝えるようにしました。



小原さん(ウズベキスタン)

日本語の文字がなぜ3種類あるのかと聞かれた時は、新聞を見せていました。紙のものでもオンラインのものでもいいですが、それで実際に見せて「これが“日本”」「“ウズベキスタン”は片仮名で書くよ」などと説明しました。

平仮名と漢字の使い方については違いをうまく説明できなかったのですが、「小さい頃は平仮名しか使わないけれど、大人になったらこういう格好いい字も書くんだぜ!」「これからもっと勉強して漢字も覚えられるといいね」というふうに話していました。



永田さん(モロッコ)

日本語教師として教えてきて、文字が増えるにしたがって脱落していく生徒たちの姿が印象に残っています。平仮名まではまだ頑張ってくれるのですが(笑)。教える立場から述べると、私は「外国のものは片仮名で書くから、これを覚えると自分の名前が書けるよ」と言ってモチベーションを刺激しました。

文字のことから少し離れますが、当時はNHKで大河ドラマ「光る君へ」が放送中で、国際放送で視聴した生徒からドラマ内のことについて聞かれたことがありました。私も詳しくないので「ひえー!」と思いながら、自分でも調べてから答えるようにしていました。

その他、日本の 〇〇〇〇はどうして？

…と聞かれた時

今や日本のアニメなどを通じて、任地の一般の人たちも日本に関するイメージを大なり小なり持っていることが珍しくない。当たり前の習慣などに対して、外国人の目を通した素朴な疑問を投げかけられると答えに窮することもあるが、先輩隊員のケースを紹介する。



小原さん（ウズベキスタン）

ウズベキスタンの場合、文化的に日本と似ているところもあるので、暮らしの様子や習慣に関して質問されることは意外に少なかったです。配属先の大学生の中にはアニメ好きの人もいて、それについて聞かれたことはあったのですが、私のほうが「ルカさん、本当に日本人ですか？」と驚かれるほどアニメを知らない人間なので、逆に質問し返す状態でした（笑）。

ともあれ、自分にそこまで引き出しがあるわけではないので、文化のことも含めて何か聞かれた場合には、日本にいた時の写真など、見てわかるものを示すよう意識していました。



松野さん（ドミニカ共和国）

家などの入り口で靴を脱ぐことなどをアニメや漫画から知る人も多く、日系人以外のドミニカ共和国人からも、どうしてなのかと聞かれたことを覚えています。そこで話したのは「日本人は清潔好きなんだよ」ということです。さらに内と外の概念も説明し、「“内”はきれいにしておく場所で、玄関を境界として外の汚れを持ち込まないようにしている」といった説明もしました。床に座ったり布団を敷いて寝たりという習慣にも触れ、「今はベッドで寝る家庭も多いけれど、部屋をきれいにしておく習慣は昔から残っている」とも教えました。



永田さん（モロッコ）

約10年前、アフリカで日本語教師の仕事をした時には、素直に文化への疑問が生徒から投げかけられたのですが、今やSNSやAIで簡単に調べられるので、そういった質問がそもそも減ったと思います。

代わりに増えたのが、オンラインで知った情報について「これは本当ですか？」と聞く“確認”の質問でした。例えば、日本の古いドラマで不良少年のふるまいを見た生徒から「日本では本当にこういうことをするんですか？」と聞かれ、「今はもう違어요！」と答えたことも。

私が教えていない情報を自力でどんどん調べていたので、本物の日本人が現地にいる意義は、その真偽を教えることに変わりつつあるのかもしれないと感じました。



知っていますか？
派遣地域の歴史とこれから

派遣国の の 横顔 〈ナミビア〉

Profile of
the partner country of JOCV



ナミビア共和国 Republic of Namibia



ナミビアの基礎知識

面積：82.4万km² (日本の約2.2倍)
人口：303万人 (2024年、世界銀行)
首都：ウイントフック
民族：オバンボ族、カバンゴ族、ヘレロ族、ダマラ族、
混血、白人ほか
言語：英語 (公用語)、アフリカーンス語、独語、
その他部族語
宗教：キリスト教、伝統宗教
※2025年9月17日現在
出典：外務省ホームページ
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/namibia/index.html>

派遣実績

派遣取極締結日：2004年12月24日
派遣取極締結地：プレトリア (※1)
派遣開始：2006年3月
派遣隊員累計：177人
※2026年4月30日現在
出典：国際協力機構 (JICA)



※1 プレトリア (南アフリカ共和国) … 派遣取極当時、ナミビアには日本国大使館が開設されていなかったため、プレトリアの南アフリカ共和国日本大使館で締結が行われた。

独立から36年、これからの発展が期待される若い国
特に厳しい社会環境にある若者への支援が求められる

Text=工藤美和 写真提供=ご協力いただいた各位

お話を伺ったのは



星野明彦さん

(リベリア/村落開発普及員/1988年度2次隊、ザンビア/村落開発普及員/1990年度8次隊・大阪府出身)
JICAナミビア支所長。民間企業を経て協力隊に参加し、リベリアの熱帯雨林の村で橋や小学校の建設などを行ったが、内戦により日本に一時退避後、ザンビアへ振り替え派遣となった。1996年にJICAに入職し、パプアニューギニア事務所員、マラウイ事務所次長、ボツワナ、サモアの各支所長などを経て、2024年4月から現職。



大西洋岸に沿って南北の幅1,288km、東西は48~161kmと細長く広がるナミブ砂漠。高さ300mに達する赤い砂丘が連なり、その絶景を目的に世界中から観光客が訪れる

ナミビアは1990年に南アフリカ共和国から独立し、人口の約半数が21歳以下という、国自体も人々も若い国です。独立後は民主的かつ安定した政治と健全な財政運営の下、鉱物資源や牛肉などの輸出によって、国全体の経済状況はアフリカの中でも比較的高いレベルにあります。一方で都市と農村部の格差が非常に大きく、若者の失業率は40%超 (2023年時点) と大変厳しい状況です。

また、南アフリカ共和国統治時代のアパルトヘイト政策の影響が残る上、さらにさかのぼった19世紀末から20世紀初頭のドイツ植民地時代にはヘレロ・ナマ虐殺 (※2) があり、人々が100年余りも抑圧の中で生きてきた苦難の歴史があります。ナミビアはようやく平和を手に入れたところで、真の発展はこれからといえるでしょう。

協力隊派遣は2006年に始まり、今年で20周年を迎えます。当初は土木、建築、道路、電気・電子設備といった技術分野の隊員が国造りに貢献し、近年は小学校教育、数学教育、環境教育など教育分野の隊員を中心に派遣しています。今後は国連機関やNGOと連携して新しい分野を開拓し、青少年

活動やコミュニティ開発などの隊員を増やしていく方針です。

ナミビアは多様な文化を持つ民族が共存していることが特徴で、総じて明るくつき合いやすい国民性です。ナミブ砂漠や野生動物に象徴される自然のほか、ヨーロッパ風の美しい街並みなど観光資源も豊富で、治安や道路状況も良いため、日本から家族連れで任地へ“里帰り”するOVが多くいます。

25年には初の女性大統領が就任し、経済の多様化と雇用創出拡大を目指しています。閣僚の半数が女性で、ジェンダー平等の達成度は世界8位 (世界経済フォーラム、2025年)、政治はアフリカの中でも比較的クリーンに行われており、こうしたガバナンスの良さにも発展の可能性を感じます。

この国の将来を担う世代にとってはまだまだ厳しい社会状況が続いていますが、地域社会やNGOなどを通して、自分たちで社会を変えようとチャレンジしている若者たちも多数います。隊員として赴任している、あるいは今後この国で活動する皆さんは、ぜひそんな若者たちと対話し、協働し、その意欲と活動を後押ししていきましょう。

※2 ヘレロ・ナマ虐殺 … 1904~08年にかけてドイツ軍が先住民のヘレロとナマの人々を組織的に虐殺した。当時のヘレロの約8割 (約6万5,000人)、ナマの約半数 (約1万人) が亡くなり、20世紀最初のジェノサイドとされている。

若者支援、インフラ整備、
学校教育などで
ナミビアの人々と共に活動した隊員たち

黒人居住区の公園整備をきっかけに 若者たちが新たな活動へ前進

南アフリカ共和国による統治時代、ナミビアの市街地はアパルトヘイトによって居住区が分けられ、現代もその影響が続く。当時の白人居住区「タウン」にはスーパーやレストランなどがある繁華街やドイツ植民地時代の面影を残すヨーロッパ風の街並み、高級住宅街があり、経済的に豊かな人々が住む。一方、多くの黒人が住むのはタウンから離れた「ロケーションエリア」で、政府が無料で貸している区画にトタンや木材で造られた簡素な家が並び、水道や電気といったインフラの整備が進まず、トイレのない家も多い。「仕事がなく、何もすることがないため、家や路上で水より安いお酒を飲んでいる大人が多かったです。ロケーションエリアでも中心部から遠くなるほど人々の生活も厳しい様子になっていくんです。あまりの貧富の差に驚きました」

そう話すのは坂本未生さん。2008年から村落開発普及員の職種でナミビア北東部の人口約2万9,000人のフルートフォンテインで活動した。配属先はフルートフォンテイン町役場。同役場の拠点は白人居住区と黒人居住区の2カ所に分かれ、坂本さんが配属された地域開発課は後者に属していた。「職員もサービス対象の住民も黒人で、要請は失業中の女性や若者への就業支援や地域の特性を生かした小規模ビジネス育成を同僚と共に行うという内容でした」。

坂本さんは地域の状況を知るために、世帯調査を行う同

僚タイヤを集めてペンキを塗ったり、土管と組み合わせて公園の遊具を作った坂本さんたち。「最初の頃は数名だけの作業でしたが、地域の若者や住民たちが次第に集まってきて、多くの人が手伝ってくれました」



さかもと みお
坂本未生(旧姓 加賀谷)さん
ナミビア/村落開発普及員/
2007年度4次隊・宮城県出身



PROFILE

大学の国際交流学部で学んでいた時、ルワンダでの識字ボランティアに参加、そこである男児から「日本の支援は嬉しいけれど、僕の生活は変わっていない」と聞き、彼らに届く草の根のボランティアを志すようになる。卒業後は4年ほど旅行会社で働いてから協力隊に参加。赴任中に隣町で活動していた隊員と帰国後に結婚、2023年には2人の娘を含む家族でナミビアを再訪し、かつての協力者たちと再会を果たした。

僚に同行した。当時、住民のうち独立後に公用語となった英語を話せるのは小・中学生がほとんどで、それ以上の世代になるとアフリカンス語(※)と各部族の言葉が多かった。「大人とは英語で直接やりとりするのは難しく、住民側には役場は訴えても動いてくれないという不信感があり、ニーズを探りにくい。さらに、日本人が珍しかったため、アジア人は皆同じ国の人で、『黒人よりも下だ』という意識で接してくることもあるのが特につらいことでした」

そこで考えたのが、現地の人たちと協力隊員が交流するサッカー大会だった。ナミビアではサッカーが人気で、他の隊員や地元の若者、役場の職員がそれぞれチームを組んで開催すると、予想以上に観客が集まって盛り上がり、日本のことや坂本さんの存在を知ってもらうきっかけになった。

そこから坂本さんは人脈を広げ、若者が職に就くための履歴書作成やビジネス基礎を学ぶワークショップ、女性を対象にした洋裁やアクセサリー作りなどの小規模ビジネスの起業支援、特産のトマトを加工する料理教室などを行った。坂本さんが提案すると、講師や場所は同僚が手配してくれた。

しかし、「参加者にはやる気が長続きしない傾向があり、役場の同僚は困っている人には物やお金を配れば良いという発想で、楽に仕事をしたい彼らにとって、私の提案は仕事を増やすため歓迎されなくなっていました。現地の方々の意識を変えることの難しさを痛感しました」

そんな中、坂本さんはロケーションエリアの公園が使えないまま10年以上放置されていることを知った。地域には他に遊び場がなく子どもたちの姿は少ない。子どもたちが外で思い切り遊ばず、親の姿をまねて家で寝ている状況は良くないと思った坂本さんは、配属先に公園の改修を相談したが、予算不足を理由に取り合ってくれなかった。

そこで坂本さんは親しくなった若者グループと公園の修復に取り組むことにした。彼らは首都を拠点とするNGOの活動を見習い、地元でHIV/エイズの予防・啓発活動をしていて、坂本さんと世代が近く英語で意思疎通ができた。

改修のための資金は、一般社団法人協力隊を育てる会の

※アフリカンス語…南部アフリカの一部を植民地化していた入植者たちのオランダ語から派生した言語で、現地の諸言語やほかのヨーロッパ言語の影響を受けて独自に発展した。南アフリカ共和国の公用語の一つとなっている他、ナミビアでは南部を中心に使われ、黒人異民族間の共通語としての機能も持つ。

「小さなハートプロジェクト」に申請して得ることができた。若者や公園近くに住民と共に、廃タイヤにペンキを塗って組み合わせた遊具や、利用ルールを掲示する看板などを作った。役場も協力的になり、重機を出して土木作業を進めてくれた。公園再生は住民と役場の協働で成し遂げられ、華々しい完成披露式典も行われた。

「子どもたちがたくさん遊びに来てブランコがすぐ壊れてしまうほどの人気でした。実はそれ以上に嬉しかったのは、その後の若者グループの意識の変化です」と坂本さん。

「バスケットボール大会を開催したい」と相談に来たのだ。若者グループはスポンサー集めの手紙作りから電話での交渉、地元のお店への協力依頼などの準備を、坂本さんのアドバイスを受けながら自発的に進めていった。役場にコート改修を申請して提供された資材で整備し、大会を成功させた。公園改修を通じて活動のヒントを得た若者たちが、意欲と自信を培うことにつながった。



坂本さんが任期後半に共に活動した若者グループのメンバー。「彼らは地域に貢献しようとして、子どもたちにHIV/エイズ対策のワークショップを自発的に行っていて、私は協力隊員として、彼らこそ支援すべきだと思いました」

上下水道の設計や管理に取り組みつつ 貧困地域の人々とも交流を深めた

土木隊員の佛圓公宏さんは2015年にナミビア東部に位置するオマヘケ州ホバビス町役場に派遣された。佛圓さんは電気や上下水道などの普及と宅地開発を進める技術部に配属され、ホバビスのロケーションエリアの上下水道の計画や設計、施工管理に取り組んだ。

「ロケーションエリアに近隣の町から来た人がトタンなどで家を造って住み着いていました。その広がるスピードが速すぎて、役場も人口の把握はできないし、インフラを整備しても、その周りにさらに家が広がっていくため追いつかず困っている状況でした」

配属先では、専門性の高い技術者が民間企業に流出してしまうため、人材が不足しており、都市計画の調査や測量、

ぶつえんくにひろ
佛圓公宏さん
ナミビア/土木/
2015年度2次隊・広島県出身



PROFILE

大学で化学を学んだ後、広島県の熊野町役場で6年間、公務員として勤務した。主に上下水道関連の工事に携わりながら、設計などの知識を深めた。日本の上下水道技術者がさまざまな国で活躍していることを知り、自分が培ってきた技術で国際貢献したいと協力隊に参加。帰国後は開発コンサルタント会社を経て、JICAジャマイカ支所、同ナミビア支所で企画調査員（企画）として勤務した。

設計、製図、積算など、本来は役場内で行う業務の多くを民間のコンサルタント会社に発注していたため財政を圧迫し、内部の人材育成にもつながらず状況になっていた。

当時、配属先では、コンピュータで設計・製図を行うCADを使ってインフラ全般の設計図が作成できるのは上司1人だけだった。町全体の都市計画図を基にして、おおまかな設計を役場内で起こし、その簡易版設計図を用いて上層部が検討した後、外部コンサルタントに詳細設計を依頼する流れになるため、簡易版設計図がないことには役場内での検討も進まない。日本で上下水道の基礎計画に従事してきた佛圓さんは、上司の負担を減らそうと、ロケーションエリアの上下水道に関わる設計図作成を志願した。

「完成すれば約300戸の住宅が新たに建つ都市開発計画があり、それに関わる上下水道管の設計も担当しました。設計図を基に役場で次年度予算を協議し、採択後に詳細設計に入るため時間がかかり、任期中に工事まではたどり着きませんでした」

2年目に入ると、配属先が小規模な新設工事は外注せず職員が施工する方針を打ち出した。また、日々発生する下水管の詰まり対策を考えるため、佛圓さんも下水管新設や修理などを行う現場チームと共に活動することになった。公務員時代にも配管工事の施工は経験がないため手探りだった。

作業チームの同僚は全員黒人で、時間どおりに出勤して仕事を始め、途中休憩や昼食もなしに働いていた。「酷暑の中で集中力が途切れ、作業が進まなくなる時もありました。残業手当が出ないため終業時間になると作業が残っていても手を止めます。効率が悪いし、現場の後片づけをするという習慣がないことにも驚きました」

下水道配管工事には測量が不可欠だ。佛圓さんは同僚たちに測量技術を教えたが、測量後に必要となる計算方法をなかなか覚えてくれなかった。

「算数が不得手なため理解しにくいようで、一向に自分で計算しようとしてくれないのです。覚えたところで昇進できるわけでもなく、むしろ私が来て仕事が増えたと感じていた面もあったと思います。私にできることとして、測量方法や計算方法をマニュアルにまとめて残しておきました」

日々、下水管修理やマンホール内の清掃にも向かった。



トタン造りの家屋が並ぶロケーションエリアで、下水管から道に流れ出す汚水。「毎日、至る所で汚水があふれ、常に臭異がまん延していました」

下水管の詰まりは、歯ブラシ、おむつ、掃除用ブラシなど人々がトイレ内にいろいろな物を捨てるのが要因だった。新設中のマンホールへのごみの投げ入れも多かった。そこで佛圓さんは、ごみのポイ捨てをなくそうとポスターを作成して役場や学校で啓発活動も行ったが、目に見える効果はなかった。

そうした日々の中で心の支えになったのは、ロケーションエリアに住む人々との交流だった。

「とても陽気で、いつ行っても私を受け入れてくれる。週末に同僚たちと一緒にロケーションエリアにあるシャビーンと呼ばれるバーに行くと、同僚の友達も集まってきて皆でいろいろおしゃべりする。お金もライフラインも不足している中で、皆が笑顔で生活している様子を見て、幸せに暮らすこととインフラの有無は相関性がないのかもしれないとも思いました。それでも、この人たちの生活水準を少しでも向上させることに貢献したい、自分ができていることを着実にこなしていこうというモチベーションにつながりました」

少し心残りを抱えたまま活動を終えた佛圓さんは、その後、国際協力の道に進んだ。24年にJICAの企画調査員(企画)としてナミビアに戻ると、任地ホバビスを再訪した。「当時携わった約300戸の都市開発計画どおりに住宅が立ち並んでいました。私が設計した上下水道の図面が使われ、予算確保につながり、計画を進めることができたのかも知れない、と感慨深いものがありました」



野外のバー“シャビーン”で語り合う人々。ドイツ領時代にはビール、南アフリカ共和国統治時代にはワイン文化が伝わったナミビアでは、酒が安く種類も豊富

たかはしきょうたろう
高橋恭太郎さん

ナミビア/数学教育/
2024年度1次隊・長野県出身



PROFILE

大学卒業後、教員として長野県の公立中学校で21年間、数学を教えた。教員生活10年目の研修で駒ヶ根青年海外協力隊訓練所を訪ねたことや、海外からの転入生との3年間の交流などを機に、「世界で困っている子どものためにできることはないか」と協力隊参加を考える。休日に英語の勉強を5年継続できたことで決心し、教員を辞めて協力隊に参加した。

数学では単位を取れないと諦めていた生徒たちに 手作りワークシートで問題を解く面白さを伝える

ナミビアでは独立後に教育改革が進み、初・中等教育の就学率はアフリカの中で比較的高いレベルにある。しかし、教員の授業スキルは十分でなく、生徒たちは特に数学や理科が苦手だ。数学教育隊員として活動中の高橋恭太郎さんの配属先、エロンゴ州ウサコスセカンダリースクール(日本の中学2年から高校2年に相当)の生徒も数学でつまずき、大多数が進級テストの合格点に達していない状況だった。

「数学の単位を落としても、他教科で必要単位数を確保すれば留年にはならないため、『単位が取れない数学は勉強しなくてもいいや』とむしろ最初から諦めている雰囲気でした」

授業の様子を見ると、生徒用の教科書はなく、教員が黒板に用語の意味や問題の解き方を書き、生徒たちはそれをノートにひたすら書き写していた。知識は得られても、いざ自力で問題を解く段階になると手も足も出なくなってしまう。さらに、ナミビアでは授業で生徒が電卓を使ってもよいから、多くが小学校段階で身につけるべき計算力や暗算力が不足し、数学の理解に一層の支障を来している。

日本の中学校で20年以上、数学を教えてきた高橋さんは、生徒たちに数学の力がつかない大きな要因は、問題を試行錯誤して解いたり、互いに相談したりするなどして、主体的に学ぶ環境ができていないためだと感じた。そこで、担当する授業に自作のワークシートを導入することにした。

「授業の要点、用語の定義、問題の解き方、例題、難易度別の練習問題までを盛り込んだワークシートを用意することで、生徒は板書を写すことに時間を費やさずに済み、考える時間を増やすことができるはず。他の先生や生徒たちが受け入れてくれるかどうかわかりませんが、まずは自分がベストだと思う方法を試してみようと思いました」

授業は1コマが40分で、そこには生徒の教室移動の時間も含まれるため、実質35分しかない。高橋さんは授業開始前には板書を済ませておき、説明は短く、問題演習の時間を長く設定。問題を進めると徐々に難易度が上がり、最後の問題を解ければ高い点数が取れるように工夫した。

そして授業終了後は生徒全員のワークシートを回収して一



ワークシートの問題の解き方について尋ねる生徒に教える高橋さん。休み時間にも「もっと教えて」と多くの生徒が来る

人ひとりの学習内容を確認し、個々のつまづきに応じて詳しい説明や解くためのヒントを書き、生徒に戻す。

そうした授業を続けたところ、生徒たちの集中度が増し、休み時間も演習問題に取り組む姿が見られ始めた。「数学がわかるようになった」「問題を解いていくのが面白い」という声が聞かれるようになり、空き時間も生徒が質問に来るため、高橋さんは大忙しになった。

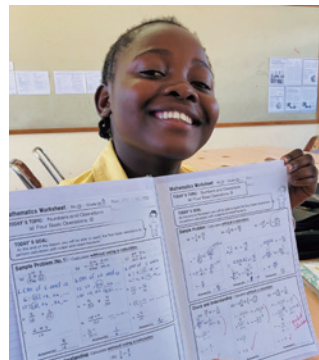
3カ月たつ頃には、「ワークシートをやると数学ができるようになる」と校内でうわさが立ち、3人いる数学教員も興味を持ち、「私たちもその方法をやってみたい」と高橋さんに声をかけてきた。それ以降は教員への技術移転を図り、ワークシートを使った授業のやり方を日常的に共有している。「生徒たちの変化が自然に先生たちに伝わったのは嬉しい手応えでした。彼らも教えることに苦勞し、授業を良くしたいという気持ちを持っていたため、うまくかみ合ったのだと思います」

同僚の教員たちは若く、10年ほどのキャリアだった。高橋さんは彼らの考え方や価値観を積極的に吸収するように努めて人間関係も築いていった。赴任から1年半余り、教員たちは単元の教え方をはじめ、テストの出題範囲や難易度設定、模範解答の検証など、教員経験の豊富な高橋さんに日々相談し、高橋さんは同僚の能力を高められるようそれぞれのスキルに合ったアドバイスをする関係になっている。

同僚は「私たちの中に新しい価値観が生まれて、この学校をもっと良くしようという気持ちを持てるようになった」と授業内容を工夫し、数学を諦めていた生徒たちは「数学ってやればできる。間違えることも勉強なんだ」と変わった。

高橋さんは全学年の授業をひととおり担当し、ワークシートは全学年分そろいつつある。他校へ異動した教員にもワークシートを活用してもらったり、州の教員向け研修を行ったりするなど校外にもその影響は広がりつつある。

高橋さんは今年8月までの任期を、2年近く教えてきた生徒たちの卒業試験が終わる11月まで延長することで合意した。



試験の成績が彼らの進路に大きく影響するため、自身の帰国から試験まで数カ月間の空白をつくりたくないと考えたからだ。高橋さんはもうしばらく生徒たちに寄り添って行く。

ワークシートで多く正解でき、嬉しそうに成果を見せる生徒

活動の舞台(裏) — 干ばつの危機の中、人々を救ってくれたゲームミート

ナミビアでは牛や豚などの畜産肉のほか、野生動物も味わうことができる。そうした肉はゲームミートと呼ばれ、いわゆるジビエ(狩猟肉)だ。レストランで提供されるほか、スーパーマーケットでも入手できる。オリックス、クドゥ(大きな角を持つウシ科の草食獣)、シマウマ、キリンなど、総じてあっさりした味で硬さや臭みはなく、おいしいという。

星野明彦さんは、そんなゲームミートの狩猟場を見学する機会に恵まれた。「ドイツ人を先祖に持つ白人の方が運営していて、狩猟エリアは端から端まで車で2時間という広さ。ビジネスとしてハンティングの場を提供し、捕獲した動物の肉を卸すことで利益を得ているようです」。

ゲームミートの恩恵は富裕層だけのものではない。2024年、ナミビアは過去数十年で最悪の干ばつに見舞われた。食糧備蓄は危機的に足りず、人口の半数近くが飢餓に直面する非常事態となった。その際、ナミビア政府が打ち出した策が、ゾウ、シマウマ、カバなど700頭以上をプロのハンターが捕獲し、飢えに直面している人々に食肉を提供することだった。牧草と水資源の許容量を超える数がある地域で、野生種の持続可能な範囲で行われ、水不足を軽減する目的もあったという。



上：ナミビアには豊かな自然に育まれた多種多様な野生動物が生息している

左：ナミビア式バーベキュー“ブライ”を楽しむ坂本未生さんの配属先同僚。主役はさまざまな種類の肉

お悩み相談

アドバイスを聞きました!

今月のお悩み

自分に取り組んできた活動が
離任後も続いていくかどうか気にかかっています

(アフリカ/青少年活動)

青少年の健全育成を目的とした公共施設で活動して、施設に関わるスタッフやボランティアに向けて子ども向けアクティビティの実践方法を伝えたり、指導マニュアルを制作したりしています。若い人たちを中心に興味を持って関わってくれていると感じていますが、主として私が旗振り役となって活動を進めてきたので、帰国した後も本当に取り組みが残るかどうかが、心配しています。



若尾先生からのアドバイス

活動に継続性をもたらすのは“ビジョン”の共有
関係者に伝える時には、内容を突き詰めて具体化しましょう

どういった活動でも、継続していくために大切なのはビジョンをしっかり伝えて共感と理解を得ることです。すなわち、活動を通じてどんな社会をつくりたいのか?どんな生活を実現したいのか?といった像を描き、わかりやすく言語化して共有するのです。すると関係する人々がバラバラに動かず同じ目標に向かい、隊員がいなくなっても活動が安定的に続いていくはずですよ。

私が西東京市で取り組んでいる「みんなの畑(※)」の活動を例にとると、「ここは畑だから、皆で野菜を育てよう」という程度では、ビジョンの言語化として十分ではありません。なぜなら、ある人は「野菜を育てて食べたい」、別の人は「農作業をしながら人としゃべりたい」などと、思いが必ずしも一致しないためです。そこで「地域で互いの顔が見える環境を築くことで、いざという時に声をかけ合える関係をつくり、精神的・身体的・社会的に健全な状態を目指す」と皆の“行動”が向かうべき方向を具体的に指し示すビジョンがあると、各自がそれぞれの思いを持って活動に参加していても、一致した目標に向かって動く暗黙のルールができるわけです。

具体性のあるビジョンを突き詰めるには、具体化と抽象化を交互に繰り返して考えることが有効で、例えば私の隊員時代の活動でいえば、「野菜を作る」▶「何のために野菜を作るのか?」▶「有機栽培を教えるため」▶「どのように有機栽培を行うのか?」▶「落ち葉や

家畜のふんで良い堆肥を作る」▶「その活動でどのような結果が得られるのか?」▶「皆が有機栽培を学べる」▶「皆が学ぶとどうなるのか?」▶「化学肥料による環境負荷が減って持続可能な土地になる/化学肥料を買う費用が抑えられ生活が楽になる」…という具合に考えを深めていくことができます。関わる人々にとって何のメリットがあるのかも含め、明確な段階までビジョンを整理して伝えられるとよいかと思います。

※みんなの畑…若尾さんが運営に携わっている農園で、地域の誰もが来られるサードプレイスとしてあらゆる背景の人を参加者として受け入れることをコンセプトとしている。

若尾さんの取り組みについてはクロスロード2023年度OV向け別冊をご覧ください



わかおけんたろう
若尾健太郎さん

グアテマラ/村落開発普及員/
2004年度3次隊・東京都出身

今月の先生

大学卒業後、IT企業を経て協力隊に参加。グアテマラの農山村で活動し、当時発生したハリケーン被害に際しては復興支援のため植林プロジェクトを主導した。帰国後の2008年から群馬県のNPO法人自然塾寺子屋に3年間勤務し、国際協力や農業の分野で経験を積む。また、高崎経済大学大学院の修士課程で地域政策を学び、12年に地元の東京都西東京市で株式会社ユニココを起業。地域づくりの支援やコーディネートなどに取り組む。



医療を通じてアフリカと日本をつなぎ、健康と笑顔を届ける——。そんな壮大なビジョンを掲げ、“置き薬”という日本伝統の医療モデルをタンザニアの村で展開している団体がある。2015年設立の認定NPO法人AfriMedicoだ。医療が行き届かない地域で解熱鎮痛薬などの基本的な医薬品や外用剤などを家庭に置き、使った分だけ代金を払ってもらう仕組み。富山の置き薬に着想を得た手法がアフリカの村落に根を下ろし、今は延べ約300世帯に提供している。「本当は隊員として活動したニジェールで始めたかったのですが、情勢の悪化でかなわず、縁のあったタンザニアで展開しています。いつかニジェールでも活動するのが目標です」と話すのは、AfriMedico代表理事の町井恵理さん。協力隊に参加したのは06年のことで、主にマラリアの感染予防に従事した。当時、識字率が20%未満だった同国ではラジオや紙芝居を使った啓発活動が中心となったが、町井さんは「データを取る」ことを重視したと振り返る。「協力隊の先輩方からの教えの一つです。独り善がりにならないように、しっかりとデータを取り、根拠を持ってアクションを進めるべきだと教えてもらいました」

町井さんは他の隊員の協力も得て、6つの村で200人以上への聞き取り調査を実施。蚊がマラリアを媒介すると知っている人が2割ほどしかいないとわかったが、啓発活動後に再び同じ調査をしたところ、8割以上が「マラリアは蚊にうつされる」と回答。まさにデータが示す大きな成果だった。

しかし課題も残った。夜も蚊に刺されないよう蚊帳の中で寝ていると答えた人がなお少なかったことだ。蚊帳を買うお金がなかったり、そもそも近所で蚊帳が売っていなかったりといった状況も判明した。

「知識さえあれば人は動くと思っていたのが甘かったのです。経済的な視点を入れて活動しなければと痛感しました」

また、薬があれば助かったかもしれない子どもが亡くなってしまいう状況も目の当たりにした。町井さんが薬代を肩代わりすれば良かったかといえば、それも違うのではないかと。人々が健康的に暮らすために持続可能な仕組みが必要なのだと考えた町井さんは帰国後、経営学を修めようと社会人大学院に進学した。薬剤師としての知識も生かして置き薬をアフリカで展開する事業は当初から考えていたが、教授からは「いったんゼロベースで、いろいろなアイデアを出してみなさい」とアドバイスされ、100ほどのビジネスモデルを考えた。

最終的には置き薬の仕組みが現地が一番マッチするとの結論に回帰したが、アイデア出しと検証のプロセスにも大きな意味があったと町井さんは強調する。「自らが納得感を持って活動し、多くの人を巻き込むことができるからです」。AfriMedicoの初期メンバーは、大半が大学院時代の仲間だった。その後、しっかりとしたビジネスモデルと活動実績が多様なメンバーを引き寄せて現在に至る。「立ち上げ期は、代表の私個人を手伝いたい、学びを自分のアクションにつなげたいという人が多く、大学院以外にも協

日本の伝統でアフリカの医療を改善する ニジェールでの体験から生まれたビジネスモデル

派遣から始まる
未来

先輩隊員たちの社会還元



認定NPO法人AfriMedicoを
立ち上げ、代表理事として活躍

町井恵理さん

ニジェール/感染症対策/2006年度0次隊・大阪府出身

Text = 大宮冬洋 写真提供 = 町井恵理さん



1

町井さんの歩み

力隊の仲間などが参加してくれました。継続期の今は、私ではなくAfriMedicoのミッションに共感して集まった人々でメンバーが構成されています。能力面でもやる気の面でも粒ぞろいで、ITから資金調達まで、組織的に活動しています」

医療を通じてアフリカと日本をつなぐことは自分の人生のミッションだと話すと共に、一人ではとても活動を続けられなかったと振り返る町井さん。メンバーに理念を共有しながら権限移譲を進めてきたが、負担は軽くない。製薬会社の正社員として働きながら9歳と4歳の子どもを育て、夜はタンザニアの現地スタッフとのオンライン会議に出る日々。町井さんも含めて40人前後の日本側メンバーはプロボノ(※)だ。「例えば日本人に月10万円を支払うと考えると、それがあればタンザニア人スタッフを10人雇える、とつい思ってしまう。ただ、私のキャパシティが組織の限界になるのは良くないですね。私も40代後半なので、持続可能な形で次世代のリーダーを育成しなければなりません」

置き薬は「セルフメディケーション」にもつながると話す町井さん。身近にある医薬品を正しく使うと同時に、手洗いやうがいをはじめとする病気の予防を学び、家族の健康は自分で守るという意識と実践が広がるからだ。また、近年はAIを用いて薬の使用状況を把握するシステムも試しており、いずれ、医師不足が深刻化する日本のへき地医療などに還元できるかもしれない。町井さんはさまざまな課題と向き合いながらもアフリカと日本をつなぎ続けている。

1 隊員時代、ニジェールの村落でアンケートによる聞き取り調査を行う町井さん
2 AfriMedicoの活動で置き薬のセットを渡す様子。過去には村の集会所や学校に置くことも試したが、現在は基本的に各家庭に提供している 3 置き薬としては日本から医薬品を送ることも検討したものの、許認可の課題などがあり、現地で販売されているもので賄うことになった 4 定期的に各家庭を巡回して、使用した分だけ料金を徴収する。巡回に合わせて、薬の使い方や予防医療などに関する医療教育も行っている



2



3



4

1977年 大阪府に生まれる



つい真面目になり過ぎてしまう私ですが、大阪出身者として笑いを大事にしたいです。AfriMedicoの行動指針の一つも「面白くあれ」です

1998年 大学の薬学部にて在学中、インドのマザー・テレサの施設でボランティア活動を経験



これがきっかけとなり、大学卒業後に製薬会社で働いていた時も、休みごとにボランティアをしていました

2006年 協力隊員としてニジェールへ赴任



短期のボランティアでは自分の目指すことがやり切れないという思いから、2年間注力できる場として協力隊に応募しました。心配して大反対していた母を3カ月かけて説得して行ったので、マインドが強くなりました

2011年 グロービス経営大学院に入学し、アフリカの医療改善をテーマに研究



「自分がやりたいか」「ノウハウや強みを生かせるか」「現地にインパクトのある貢献ができるか」の3点でビジネスモデルを考えました

2014年 任意団体としてAfriMedicoを設立。同年に東京都主催の「TOKYO STARTUP GATEWAY 2014」にて最優秀賞を受賞



ビジネスコンテストには積極的に参加して、賞金を渡航費などの経費に充てていました

2015年 大学院メンバーと一緒にAfriMedicoをNPO法人化

2025年 設立10周年を迎える



AIによる画像認識で在庫管理と代金回収ができる仕組みにトライし始めました。システムは、IT企業に勤務しながら活動に参加しているスタッフが構築してくれました

JICA海外協力隊ウェブサイト
「帰国した方へ」もご覧ください

<https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/>



INFORMATION

JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ

REPORT

初開催！ JICA海外協力隊応援基金 記念イベント「感謝の集い」

4月18日(土)、JICA地球ひろば(東京都千代田区)にて実施された「協力隊まつり2026」の会場で、2年前に発足したJICA海外協力隊応援基金の「感謝の集い」を開催いたしました。これまでにご寄付をお寄せいただいた皆様への感謝の気持ちをお伝えしたいと思い、初めて実施しました。

当日は、感謝状授与のほか、干場 圭さん(バナアツ/防災・災害対策/2023年度3次隊)からご寄付を活用した活動の報告を行いました。寄付者の皆様をはじめ、隊員経験者や協力隊を目指す方など、60人を超える方にご参加いただきました。後半は、ご寄付をいただいた方々同士の交流の場として、協力隊OVが関わる事業で生産された「ペレケの村」のハーブティーや「寺田養蜂園」の国産天然はちみつなどをご紹介します。和やかな雰囲気での交流を深めることができました。

引き続き、開催を検討しておりますので、皆様もぜひ、一緒に集いませんか！

JICA海外協力隊応援基金
についてはこちら



応援基金で導入した訓練用消火器の活用を報告する干場さん

REPORT

ケニア派遣60周年及びケニアOB・OG会 設立10周年記念イベントの開催

青年海外協力隊のケニア派遣60周年と協力隊ケニアOB・OG会設立10周年を記念し、協力隊まつりの開催に合わせて4月18日(土)に記念イベントが開催されました。クロストークセッションには、ケニアOVが立ち上げたNGOが3団体と、ケニアOB・OG会が登場。長野県でインターン中のケニア人も参加し、経験に基づいた中身の濃い対話が実施されました。また、記念パーティーでは駐日ケニア大使館よりモイ・レモシラ大使をはじめ3人のご来賓を賜り、昭和の隊次から新卒者、帰国したばかりの隊員まで、世代を越えた意見交換を幅広くできました。当日の様子はケニアOB・OG会のFacebookなどにもアップされておりますので、ぜひご覧ください。

協力隊ケニアOB・OG会
Facebook



クロストーク後の参加者一同

協力隊ケニアOB・OG会
ウェブサイト



記念パーティーも盛り上がりました！

AWARD

第4回 JICA海外協力隊帰国隊員社会還元表彰式の開催

JICA海外協力隊経験者で、国内外、公私問わず社会課題の解決に取り組んでいる方を表彰する「JICA海外協力隊帰国隊員社会還元表彰」。第4回の入賞者をJICAウェブサイトにて発表しました。表彰式・大賞決定イベントは6月8日(月)に開催予定です。表彰式の様子はオンラインでも配信予定ですので、ぜひご覧ください。

JICA海外協力隊帰国隊員
社会還元表彰についてはこちら



第3回大賞受賞者の青木由香さん(左)とJICAの田中明彦理事長

編集後記

今号より新コーナーとしてP22「OB・OGショップファイル」がスタート！OVの方々が取り組んでいる物販(小売り)の活動について、品物の魅力を中心に紹介しています。自薦・他薦を問わず、販売に取り組んでいる方の事例も常時募集していますので、ぜひ右記の編集室メールアドレス宛てに情報をお寄せください。(飯淵一樹)

P23「隊員めし」で、かねてから取り上げがかった、“最小限の材料で作るカレー”が、内藤直樹さんのご協力で実現しました。カレーはある程度アバウトでもいいのではという考えが覆され、グラム単位で緻密に計算されたレシピで、全ての材料が見事に調和しておいしさを演出していました。皆さんもぜひ作ってみてください！(阿部純一)

クロスロード

[2026年6月号]

第62巻第5号 通巻716号
発行日:2026(令和8)年6月1日

隊員の皆さんから「みんなに紹介したい活動アイデア」「現地での出来事」などの情報や経験談も随時募集中です！

今号の『クロスロード』はいかがでしたか？
ぜひご意見やご感想をお寄せください。
『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp



『クロスロード』は、
JICA海外協力隊の
ウェブサイトでも公開しています。

<https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html>



●本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。
●本誌に掲載されている記事等の内容は、協力隊員(OV含む)の個人的見解であり、JICAの公式見解を示すものではありません。

あの日、地球の、あの場所で。

ワールドカップで町は機能停止？ 仕事も勉強もそっちのけに！

ひろせたくや
廣瀬拓哉さん

日系/ブラジル/野球/2017年度1次隊、
短期/ペルー/野球/2023年度9次隊・大阪府出身

サンパウロ市から約100kmのインダイアトゥバ市にある日系人協会の野球部で、青少年チームの指導をしました。任地は常日頃とても穏やかな町なのですが、ある時期だけは雰囲気が一変。それがサッカーワールドカップの時でした。

開幕後のある日、私が行きつけの理髪店に行った時のこと。入り口で声をかけても席に案内されないため店内を見ると、理容師2人と先客1人がテレビ中継に見入っていました。この日はブラジル戦ではないのに、仕事に手につかない様子。やっと気づかれて席に通されると、今度は私を担当する理容師と隣の担当がプレーの批評合戦を始め、たまに髪を切っては言い合うことの繰り返しでした。ボールがゴールに迫ると手は完全に止まり、シュート時は絶叫して天を仰ぎ、ボールがコート外に出てプレーが止まるとやっと少し切る、という具合。結局、

いつもは30分で終わる散髪が2時間かかりました。私は言葉もあまりわからないのでノリについていけず、「早く切ってくれ〜」と思いつつ、出してもらったコーヒーを飲みながら、熱狂ぶりをほほ笑ましく見ていました。

そしてブラジル代表戦の日には、前日に同僚から、「明日は町のすべてが止まるからね。買い物に行くなら今夜のうちに!」と忠告されていたのですが、道路はガラガラ、町からは人が消え、小・中学校も試合がある午前中は休み、と日常生活よりも観戦が優先でした。

ブラジルでは、誰もが代表チームの黄色いユニホームを着て応援していました。私の出身地大阪でも、皆一様に黄色と黒のタイガースカラーに身を包んだ阪神ファンの熱い応援が有名ですが、その連帯感や熱狂ぶりには相通じるものが感じられました。遠く離れていても、スポーツファンの気質は同じなのだ、と興味深く思いました。



Illustration = 牧野良幸 Text = 成松佳子 (本誌)



OB・OG ショップ ファイル

No.01

風さんぼ

モンゴルから買いつけた羊毛製品などを扱っており、イベントやマルシェでの出店を中心に、ECサイトや委託販売を通じて一般向けに販売中。

公式オンラインショップ



公式 Instagram



- 店舗情報などはショップブログとInstagramで随時発信中
- 6月20日(日)、エシカル・ツキイチ・マルシェ(名古屋市)のOVブースに合同出店予定



あべ さき
安部 咲(旧姓 服部)さん
モンゴル/小学校教育/
2015年度1次隊・愛知県出身

現職教員特別参加制度を利用し、協力隊員としてモンゴル南部のドルノゴビ県で活動。2017年に帰国・復職した一方、モンゴルについて日本で伝えたい思いを抱き続け、25年にキャリアチェンジしたことを機に風さんぼの活動を始めた。

主力商品である羊毛の靴下。隊員時代からの知人を介して現地工場から買いつけ、大人用・子ども用・赤ちゃん用の3サイズを販売している



民族衣装「デール」の端切れから安部さんが作っている「本がちょうど入るファスナー付き巾着」。「本」をテーマとした活動にも注力しており、「くるみボタンのブックマーカー」など、本に関する商品を増やしている



さまざまなイベントで企画に沿った商品を紹介。2025年は地元の愛知県内での活動だったが、26年は他県での出店も計画しているという

遊牧民が飼育しているヒツジやヤギたち。「ヒツジは草を根絶やしにするまでは食べないので環境負荷が小さいといわれているため、風さんぼではウール製品を扱うことにこだわっています」

モンゴルの魅力ある品物を通して 現地とつながるきっかけをつくりたい

協力隊経験を通じてモンゴルの遊牧文化に魅せられた安部さんが2025年に立ち上げたショップ「風さんぼ」。遊牧民の暮らしに根差したウール製品と、民族衣装「デール」の端切れを生かしたアップサイクル雑貨を、ECサイトやイベント・マルシェへの出店などを通じて販売している。

メイン商品は工場から直接仕入れているウール靴下とレッグウォーマー。冬にはマイナス30℃にもなるモンゴルで、現地の人々が日常的に愛用している国民的な商品だ。安部さん自身、その暖かさを身をもって感じた経験がある。「ウール製なので保湿・保温性に非常に優れていて、協力隊からの帰国時にも、ぜひ日本へ持ち帰って紹介したいと思っていました。汗で蒸れにくく、冬以外のアウトドア活動にも重宝します」と安部さん。環境負荷の大きいヤギを増やさず、ヒツジを多めに飼うという遊牧民の知恵にも共感し、ウール製品にこだわっている点も特徴だ。その他、民族衣装「デール」の端切れを使ったハンドメイド雑貨は、鮮やかなシルク生地を安部さん自らがミシンで縫い上げて作っている。

風さんぼには「モンゴルに興味を持ち、できれば実際に行ってほしい」との思いが根差し、商品はその入り口という側面もある。各地のイベントで遊牧民の文化や魅力を語りながら販売するスタイルは、いわば自らが遊牧民さながらの自由さで移動する店といえるだろう。

Text=油料真弓 写真提供=安部 咲さん

任地の食生活に彩りま!

隊員めし

今月の料理

パプアニューギニア隊員から教わりました!

ミニマムな素材で堪能する本場の香り 北インド系チキンカレー

教える人



ないとうなおき
内藤直樹さん

パプアニューギニア/
コミュニティ開発/
2013年度4次隊・兵庫県出身

大学卒業後、食品メーカー勤務、アジア放浪を経て、協力隊に参加。帰国後、レストランでの勤務を経験し、2019年に「スパイス計画」を立ち上げる。南アジア各地の家庭やレストランのキッチンを訪ね、風土に根指した料理を写真とレシピで記録。「食」にまつわる執筆を行い、その記録を基にして商品開発や料理教室、ポップアップレストランを日本各地で開催している。



隊員時代はパプアニューギニアの農村で、健康増進や食の多様化を目的とし、住民への料理指導などの活動を行った



内藤さんはスパイス計画の活動を通じて、多くの人に料理と、そこに込めた“思い”を届けている



材料 (3人分)

- [A]**
- 鶏もも肉 (皮つき) 450g
 - 塩 6~7g
 - レモン汁 12g
 - おろしにんにく 20g
 - おろししょうが 20g
 - トマト 80g
 - ターメリックパウダー 小さじ1
 - チリパウダー 小さじ1
 - クミンパウダー 小さじ5
 - コリアンダーパウダー 小さじ3
 - 砂糖 5g

- [B]**
- 植物油 25g (大さじ2)
 - タマネギ 100g

- 水 100g (100ml)
- パクチー (お好みで) 適量

※調理に使う鍋は直径22cm程度が最適。

レシピ

- 鶏もも肉を大きめの一口サイズに切り、トマトを小さめのザク切り、タマネギをできるだけ薄くスライス、お好みでパクチーをみじん切りにする。
- ポウルに[A]をすべて入れよく混ぜてから、20分~1晩おく(1時間以上おく場合は乾燥防止にラップなどで覆う)。
- 鍋に[B]を入れて中火にかける。タマネギのふちが色づいてきたら、よく混ぜながら揚げ焼きし、薄茶色に揚がってきたら火を止める。そこに②と水を加え、よく混ぜて、ふたをして再び中火にかける。
- 沸騰したら弱火にし、時々混ぜながら30分間煮る。もし水分が少なくなり焦げつきそうになったら、水を30~50g加える(分量外)。パクチーを入れる場合は食べる直前にカレーに混ぜ込む。

ポイント

- 缶詰のトマトではなく生のトマトを使う。
- 鶏肉をスパイスで漬け込んで、最低20分おくことで味がしみ込みおいしくなる。
- タマネギを揚げ焼きする際、色がつきはじめたら急に色が変わるので注意。よほど真っ黒に焦がさない限り、おいしく仕上がる。

料理について

スパイス料理の魅力の一つは、料理の香りがかぐことで現地の気分を味わえることにあります。私が旅したどの国にも独自のスパイスの調合があり、その香りを再現することで、国の風景を思い出すことができます。また、スパイスの組み合わせや分量を少し変えるだけで印象がガラッと変わる、作っても楽しい料理です。ご紹介したカレーは、現役隊員の方でも入手しやすいオーソドックスな材料を使ったレシピです。コツをつかんだら、ぜひ自分のオリジナルな組み合わせにもチャレンジしてみてください。

スパイス計画

Online Shop



Instagram





公開!

私の派遣国生活

[チュニジア]

写真提供 = 布施真帆さん Text = 松田亜弓



ふせまほ
布施真帆さん

音楽 /

2024年度1次隊・東京都出身

暮らしている市、町、村

任地のスース市はチュニジア第3の都市で、世界遺産の旧市街(メディナ)で知られています。地中海に面していて、週末にはビーチを中心に多くの観光客が訪れて賑やかで、スーパーや商店街もあり暮らしやすい街です。ただ、中東部に位置するスースは半乾燥気候で夏は暑く、断水も多いためペットボトルに水をためておくなどの備えが必要です。



右: 白い壁と青い扉のコントラストが美しいスースの街並み。沿道には観光客が立ち寄る店も多い

下: 「住まい近くの小高い場所から眺めるメディナとその向こうに広がる地中海の景色が特に気に入っています」



デュラム小麦の粗びき粉から作る粒状パスタのクスクスと、鶏肉や魚を蒸して味つけたものが代表的な家庭料理です。チュニジアではハリッサという唐辛子のペーストを使うことが多く、どの料理も辛いです。オジャというハリッサとトマトのスープにソーセージなどを入れて煮込んだ料理もおいしく、レストランで600円ほどで味わえます。

食べ物



左: 普段は主に自炊している布施さん。「野菜は安価に買えますし、最近はいちごやゆを扱いはじめたお店もあるので、日本食を作ることが多いです」

下: クスクスと魚を盛りつけた一皿。「スパイシーでおいしく、チュニジアで好きになった料理です」



活動の様子

配属先のスース公立音楽学校の生徒たちは、通常の学校が終わった後に通ってくるため、授業は午後2時半ごろから始まります。私は1日に5~10人ほどの生徒にピアノの個人レッスンをしています。楽しく続けてもらいたいので、生徒とはなるべく会話を多くし、良いところを褒めることや、練習するポイントを明確に教えることなどを意識しています。



上: 生徒は5~25歳と幅広く、好きな曲が弾けるようになりたいという目的で通う人が多い
左: 今年2月のクラス発表会。「生徒の一人が私のために日本の童謡『さくらさくら』をひそかに練習して披露してくれるというサプライズがあり、とても嬉しかったです」

住まい



布施さんの住まいは配属先から歩いて30分ほどの場所にある

集合住宅で一人暮らしをしています。間取りはリビングと寝室、キッチン、風呂とトイレのシンプルな造りで、キッチンにはガスコンロと冷蔵庫、オープンなど自炊できる設備が整っています。寝室の窓からは街並みと、その向こうに海が見え、朝はすがすがしい気持ちになります。



JICA海外協力隊
応援基金
皆様からの応援
お待ちしております



青年海外協力隊事務局
公式Instagram
JICA海外協力隊のリアル
お見せします



JICA_KYORYOKUTAI

JICA海外協力隊
公式LINEアカウント
シゴト診断、教えて! FAQ
などぜひ活用下さい

